

## 2015年度 国際文化情報学会 発表要旨

法政大学, 国際文化学部

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

異文化 / 異文化

(巻 / Volume)

17

(開始ページ / Start Page)

54

(終了ページ / End Page)

155

(発行年 / Year)

2016-04-01

# 日本人ひきこもりと在日外国人ひきこもりの比較 ：家庭環境と社会環境による影響

国際文化研究科修士課程1年

林婷民

## ◇研究テーマ

日本人ひきこもりと在日外国人ひきこもりの比較：家庭環境と社会環境による影響。

## ◇研究目的

目的として、ライフヒストリー研究法を通じて、家庭環境と社会環境が、日本人ひきこもり対象者と在日外国人ひきこもり対象者にとって、どのような影響があるのかを明らかにしたい。そして、この研究の結果をさらにひきこもり対象者の支援(支援団体や心理カウンセラーへのフィードバックなど)に応用したいと考えている。

## ◇研究方法

ライフヒストリー研究法を使用すると考えている。

## ◇ひきこもりについて

「ひきこもり」とは、不登校や就労の失敗などをきっかけに、何年もの間自宅に閉じこもり続ける人の状態像を指す言葉である。ひきこもりは精神疾患の診断名ではなく、あくまでも状態像である。

本研究で使うひきこもりの定義は、ひきこもり研究の第一人者、斎藤環先生の下記の定義を使うこととする。

- ①六ヶ月以上社会参加していない。
- ②非精神病性の現象である。
- ③外出していても対人関係がない。

上記すべての条件を満たす場合には、「ひきこもり」と考える。

## ◇ひきこもりの現状

平成22年に内閣府の行った調査によると、15歳～39歳の年齢層を対象にした調査結果は、「狭義のひきこもり対象者」が約23万人で、「準ひきこもり対象者」が約46万人と推計された。両者を合わせると実は約70万人ものひきこもりの若者が存在するという結果だった。

同じ調査で、ひきこもりになったきっかけに関する質問の回答は、職場関係（就職活動に失敗した、職場に馴染めなかったなど）は44%占めていて、学校関係（受験失敗、学校の人間関係など）が約20%占めている。

#### ◇海外から見るひきこもり

ひきこもりに関する初の国際共同調査（「ひきこもりは海外にも存在するのか？」）によれば、日本と海外の精神科医にインタビューした結果、日本におけるひきこもりの症例について、どのような診断がくだされるのかが明らかになった。ICD-10（疾病及び関連保健問題の国際統計分類第10版）・DSM-IV（精神障害の診断と統計マニュアル第4版）の診断基準で診断できるかどうかについて、日本精神科医は5割以上それらの診断基準では診断できないと回答した。他国の精神科医の回答も様々であったが、日本の精神科医と同様に、診断できないという回答を多く得た。

ICD-10・DSM-IVの診断基準にとらわれずに、精神科医それぞれが考える最も相応しい診断名を自由に記載してもらった。「Hikikomori」とダイレクトに診断したのは日本、韓国、台湾、タイ、アメリカの精神科医の一部であった。

#### ◇研究対象

- ・日本人ひきこもり対象者
- ・在日外国人ひきこもり対象者

今現在ひきこもっている対象者にライフヒストリー研究法を実施するのはいくつかの難点があるので、今一番望ましい対象者は「ひきこもり経験者」である。

#### ◇予想される結果

家庭環境と社会環境は、ひきこもり現象に関係が深いと考えられる。そして、ひきこもりになる原因やひきこもりになる過程に、これらの環境がどのように影響するかについて、ライフヒストリー調査の結果から明らかにしたいと考えている。

さらに、ライフヒストリーの調査結果を分析して、日本人ひきこもり対象者と在日外国人ひきこもり対象者の差異を比較したい。そして、研究結果をひきこもり対象者の支援につなげることができればいいと思っている。

#### ◇今後の問題点

1. 調査対象者への接触のプロセス。支援団体とコンタクトを取り、協力してもらえる「ひきこもり経験者」を調査対象として調査を行いたい。
2. 二人の対象者（日本人のひきこもり対象者と在日外国人ひきこもり対象者）を調査し、内容（家庭環境と社会環境など）として著しい差異がない場合は、どうやって分析するのを考えなければならない。

# 林京子『予定時間』論

国際文化研究科博士後期課程

熊芳

林京子は上海を素材にして三つの長篇小説を書いた。単行本発行の時間順で挙げれば、それぞれ『ミッシェルの口紅』（一九八〇）、『上海』（一九八三）、『予定時間』（一九九八）となる。前の二作は、戦時下における幼児期から少女期のおよそ十四年間の上海生活、戦後三十六年ぶりの上海再訪の体験に基づいて書かれた、私小説の形で語る林京子の創作スタイルに一貫した自伝的な作品である。ところが、最後の一作は、林京子の通常の創作手法と異なり、アジア・太平洋戦争中、新聞記者として二回も上海に渡り、敗戦後もそこにしばらくいた男性主人公「わたし」が老後、自分の上海体験を回想的に物語ったものである。この意味においては、上海を題材とした創作で異彩を放つこの作品は、林京子の文学を考える上で注目に値すると言って良いだろう。

『予定時間』を『群像』に発表した直後、川村湊がこの作品を次のように評している。

軍国主義の立場からも、反日主義の立場からも、等距離的にバランスのとれた日本人記者が、上海での見聞や従軍記者として体験したことを声高になることなく、坦々と語り続ける（実在のモデルがいそうだが）。戦中の、いわば普通の人が見て、体験した上海や中国がそこには描かれていて、軍国主義や植民地主義の貴重な証言となっているのだが、やや「予定調和」的な構成になっていて、主人公の優等生ぶりに物足りなさを感じた。（『毎日新聞 一九九八年五月二六日付夕刊』、『文芸時評 1993 - 2007』、水声社、二〇〇八年七月、二二三頁）

この評論を読んで、いくつかの疑問が浮かんだ。川村の言う『予定時間』における優等生ぶりの実在のモデルとはどのような人物なのだろうか。戦時下の上海生活は、武田泰淳や堀田善衛をはじめとする大勢の文学者によって、数多くの小説にすでに描かれている。では、なぜ林京子はやや「予定調和」的な構成で新聞記者の上海生活を書くことにしたのだろうか。林京子の通常の創作からさらに、なぜこれまでの創作に登場させなかった男性を主人公にしたのか、すでに少女の視点から戦時下の上海の生活を語ったにも関わらず、大人の視点からもう一度上海の生活を描く理由はいかなるものだろうか。作品にどのような上海、あるいは上海生活が描き出されたのか、新聞記者の上海生活を描くことによって作者は何を伝えたいのか、等々疑問に思う。

以上の問題意識から生まれたのが本発表である。本発表では、これらの「謎」を解くために、『予定時間』という作品を対象に、主人公と登場人物のリタ、作品の成立、物語の展開について詳細な考察・検討を試みる。なお、上海を題材に採った前の二作『ミッシェルの口紅』、『上海』との比較を行い、林京子の夫婦関係をテーマにした『谷間』などの作品とを関連づけてみることによって、作者の創作意図を明らかにする。さらに、以上の考察を踏まえて、林京子の文学における『予定時間』という作品の位置づけについて論じてみたい。

# 南三陸町における津波の経験を活用した 自然との共存と地域開発の可能性

島野ゼミ  
飯島大地

島野ゼミは、震災や津波の被災状況や震災後どれくらい復興したのか、さらに現地の人たちへのインタビューをもとに、津波によってもたらされたポジティブな影響や新しい可能性について調査した。

ポジティブな影響や新しい可能性について、我々は大きく2つの発見をした。一つ目は、人々と生態系のバランスを調整した開発の模索である。津波によって人々の生活と自然・生態系は様々なダメージを受けた。例えば、地盤沈下・塩害・海の中の養殖場の流失・沿岸生態系を構成する生物種の変化などというように、津波によって失われた環境は人々と自然の両者にとって多種多様である。しかし、海岸生態系を見直してみると、海岸生態系には津波が起きる前からすでに、防潮堤の設置など、人の社会を津波から守るための開発と破壊が行われ、回復力の乏しい生物（特に絶滅危惧種や地域特有の生物）にとってかなり致命的な影響を受けていた。確かに、人間にとってその地域の生活があり、歴史的また地理学的には地震と津波は切り離せない関係性にあるのだから、それに対する防御手段を持つことは重要である。

だが、今回の津波から学ぶことが出来たように、自然の力はもはや自然科学で予測できる範囲を大きく上回った。人々の社会と生態系のバランスを調整した開発を模索しなければならない。

二つ目は新しい形の漁業を中心とした地域の再活性化の手法である。例えば、今回の南三陸のフィールドワークで漁業体験を経験した。漁業体験のツアーを運営し、ガイドしていた村岡賢一さんの名刺の肩書に注目すると、漁業をだけをしているのではなく、観光業にも漁業の面からアプローチしていることが分かった。漁業を活かした観光業は、震災以前から南三陸で行われていたが、震災により知名度が上がったことや、学びの場としての南三陸と注目されることで、多くの若者が南三陸を訪れ、このような漁業体験を通して震災を知ること機会を得た。この新しい形の漁業中心の観光産業やグリーン・ブルーツーリズムを提供していくことによって、人口問題の最先端と言われる南三陸の人口問題や地域活性化の改善につながるのではないかと考えたのである。実際にフィールドワークを通して発見した現状は、地震とりわけ津波をポジティブに捉える努力を行うことで自然との共生を捉え直し様々なビジョンで復興を目指す人々の姿であった。

東北の復興に対して人々の注目は日々希薄化していると被災地の人々は感じている。復興

はようやく土台が完成してきた段階であり、完全復興まではまだ長い目で見なければいけない。だからこそ、私たちができる東北復興への取り組みは、私たちの関心を常に向け続けることがその基本であり、また、被災地での経験を伝えることにより、被災地以外に住む人々の関心のベクトルを被災地に向け続けることだと強く感じた。

# KAGUYA

鈴木晶ゼミ

面川梨夏・小山祐季・瀬戸光・佐和田伊吹・若菜郁  
桐山紗緒梨・市川明希・松浦茜・原寛之・浅野太心

初恋を覚えていますか？ ある偶然の出会いが、平凡な大学一年生、蒼大の日常を彩る。しかし、蒼大の初恋の相手は別の世界のお姫様であった…。出会うはずもなかったふたりが、偶然のめぐり合わせによって一緒に過ごす時間の中で、互いにかけてがえのない存在となっていく。

私たちの日常は様々な出会いで溢れています。時には辛い別れも訪れることでしょう。それらの出会いや別れのなかには、私たちの人生に影響を与えているものがたくさんあるのではないのでしょうか？ 恋人に限らず、今まわりにいる仲間や家族、そしてこれから訪れる新たな出会い一つ一つを大切にしていきたい、そんな想いが込められた作品です。

三年生10人で初めて構成・演出・編集全てを行った作品です。脚本を書くところから始まり、撮影、編集もかなりの時間がかかり苦労しました。主に一眼レフ・マイク・レフ版を使い撮影しました。編集はMacのiMovieとプレミアを使用しました。

監督：小山祐季

助監督：面川梨夏

キャスト：瀬戸光 佐和田伊吹

脚本：若菜郁

絵コンテ：市川明希

カメラ：桐山紗緒梨

編集：浅野太心 松浦茜

機材：原寛之

## <撮影技法・工夫点>

- ・グリーンバック

かぐやと母の交信シーン

架空の世界を表現するため、ソフトで幻想的な空間の創造を試みました。グリーンバックを使用して部屋から交信場面への背景の切り替えをスムーズにしました。

- ・手持ちカメラによるロングショット

手持ちカメラによるロングショットを多用することで、ドキュメンタリー要素を加えキャ



ラクターの日常に寄り添った映像を演出しました。

- ・日没後の屋外撮影

被写体を照らす十分な明るさのライトがなかったため、iPhone の懐中電灯機能を利用し、約 10 台の iPhone で多方向から光を当てました。

- ・デートシーン

渋谷のスクランブル交差点で、人混みの中での撮影に苦労しました。

デートシーンはテンポよく楽しさが伝わる画にするために、アップテンポな音楽とトランジションを用いました。

また、デートシーンでは徐々に二人が惹かれ合う様子を表現しました。

- ・プリクラのシーン

実際にプリクラ機で撮影し、一眼レフのフラッシュでプリクラのフラッシュを演出しました。

- ・マンガ

かぐやが月の世界を説明するシーンではマンガを使い、異世界の想像を掻き立てる演出にしました。

### <発表後の反省点>

- ・音質が安定せず、聴きづらい部分が多くありました。今後は全体を通して統一した環境音を流し、音切れが目立たないようにしたいです。また、なるべくアフレコをせずマイクで音を拾うことにこだわりましたが、全体的に不安定な音声になってしまったので、聞き取りやすさを重視するべきだと思いました。
- ・手ぶれが目立つシーンが多かったので、今後はスタビライザーを使い安定した画面をつくります。
- ・夜のシーンでは明かりが十分でなく、暗すぎる場所がありました。

